

土地に埋もれた神話

発掘された、祭りの姿

「万物には精霊が宿る」

太古の昔より、人は自分の力でどうすることもできない、大自然の偉大な力に抱かれて生きてきました。生きとし生けるものの生と死、多産と豊穡、地震・雷・風・雨・日照り・雪などは、すべて「大自然の成せる業」です。日々の暮らしが自然に大きく左右された太古の人びとにとって、自然こそ「カミ」として「敬い」「恐れる」対象であったことでしょう。彼らは、身のまわりすべてに生命力を感じ、その生命力＝**精霊**を信仰の対象にしていたようです。

縄文人と生命

人びとが土器を発明し、動植物の採集と狩猟、漁労を生業に山野を駆け巡っていた縄文時代。この時代の遺跡からは、縄文人が生命に対して感じた神秘や祈りを思わせる遺物が数々発見されています。

たとえば、「土偶」と呼ばれる、粘土を焼いて作った人形がそうです。土偶はその大きなオッパイと丸く大きなおしりから、「赤ちゃんを身籠もる女性」をモデルにしたものと言われています。おそらくは、生命を産み出す女性の神秘的な力にあやかっ、多産と豊穡を願ったものでしょう。

また「石棒」と呼ばれる、男性のシンボルをモデルにした石製品もあります。これは男性のシンボルを生命の源と考え、その聖なるたくましい力に多産と豊穡を祈った祭りの道具と言われています。男性のシンボルを祀るのは、子宝祈願や安産祈願として、今日も県内各地で見ることが出来ます。

ところで、あなたの家には古くなった人形やぬいぐるみ

が捨てられずにいつまでも飾られていますか。なぜ捨てることができないのでしょうか。それは人形を家族のように扱い、遊んだり話しかけた思い出や、心のどこかで魂を持った存在と想っていた記憶があるからではないでしょうか。こつした感情こそ「万物に精霊が宿る」と身のまわりすべての事物を信仰の対象とした、縄文人の心の名残りと言えるかもしれません。



石棒(三刀屋町内、吉田村内出土品) 男のシンボルを形どったもので、県内では、数例の出土しか知られていない。

現代版・男のシンボル!

(松江市・八重垣神社境内) 県内には、現代も男のシンボルを祀り、子宝祈願や安産祈願をする場所が見られる。

呪いの世界 縄文人の願い



よみがえる縄文人の祭場(匹見町・ヨレ遺跡の配石遺構) 大小さまざまな石が、円や直線を描くように並べられたり、何力所かにまとめて置かれていた。祭りに使われたと思われる遺物も出土しており、縄文人が何かを祈った祭りの場所とも考えられる。



縄文人が使った祭りの道具?(県内各地の出土品) 縄文の遺跡からは、土偶と呼ばれる人形、鳥形や円盤形をした土製品、骨や石や土でできたアクセサリー(首飾りや耳飾り)らしきものなど、用途のはっきりしない遺物がときどき出土する。これらは、呪いの意味を持つ特別な道具と推定されている。

生命への祈り 土偶と石棒



土偶(匹見町内出土品) 乳房とくびれた腰の表現から、女性をモデルにしたものとわかる。



豊穡の祭り 弥生人と稲の祭り



恐ろしいカミの眼 = 弥生の邪視紋銅鐸(宍道町木幡家蔵) / S. 現代の神楽面 一つの世も、カミはときに恐ろしい眼と形相で、邪悪なものを睨みつけ、袂い除く力を持つと考えられていたらしい。出雲から出土したと伝えられる弥生時代の銅鐸には、切れ長の眼で睨む何者かの姿が描かれている。現代の神楽面であらわされる神々の顔にも、どこか似ている。



南海の宝物 - コホウラ貝の腕輪 - (平田市・猪目洞窟遺跡出土) 県内から出土した、南海(南西諸島周辺)産の貝で作られた腕輪類。貴重品で、特定の人物のみが身につけたのだろう。海の彼方の宝器と呼ぶにふさわしい品である。



カミを招く木の鳥 (松江市・西川津遺跡出土ほか) 鳥は、カミの住む天空と人の世を往来し、霊魂を運ぶものと考えられていたらしい。木の鳥は、稲作の祭りの祭場に立て並べ、カミの依り代とされたのだろうか。写真提供: 大阪府立弥生文化博物館

弥生人と稲の祭り

今から約二千年数百年前、大陸から海を越えて、稲作と金属(鉄器・青銅器)の使用という新たな文化がやってきました。弥生時代の到来です。稲作の伝来は人びとの主たる生業を、採集・狩猟から植物を栽培する農業へと変化させました。暮らしや社会の仕組みが大きく変化する中、祀るカミや祭りの様子、祭りの道具も大きく変わっていきます。

縄文時代、大自然に満ちあふれていた無数のカミは、弥生時代になると、稲作に関わるカミ(稲魂、穀霊)と祖先のカミ(祖霊)を中心に、徐々にまとまっていったようです。とくに稲作を中心とする、ムラなどの農耕の祭りが盛んになったと想像されます。おそらく春には豊作を祈願し、秋には収穫に感謝するムラ祭りが行われたことでしょう。今日に伝わる神社の祈年祭・春祭りや新嘗祭・秋祭り(の起源も、「こころ」にあると考えられています。祭場ではムラの祭器や宝器として、剣・矛・戈といった



カミを招く土笛 (松江市・西川津遺跡、タテチヨウ遺跡出土) 一つの世も、カミを招くには鳴物が必要だった。土笛は中国大陸にそのルーツがあるらしい。日本海側で多く出土したもので、稲作とともに伝来したものだろう。

武器形の青銅器が使われたようです。これは、武器の威力にあやかり、邪悪な霊魂を祓(はら)ゆる意味を持つものと考えられ、今日の神事や神楽に見られる剣舞に通じるものがあります。またカミを招くには、音楽を必要としたようです。弥生時代の遺跡からは、楽器と思われる銅鐸(黄銅色に輝き、木などに吊して、ゆすって鳴らされたベル)や土笛も見つかっています。さて、稲作の発展は、やがて富の蓄積と身分の差、富と権力の奪い合い、戦争を生み出したと考えられます。やがて、ムラやクニを治める各地の有力者たちは、競って巨大な墓(古墳)を築くようになりまし

光輝く青銅の祭具 - 剣・矛・鐸 -

(斐川町・荒神谷遺跡と鹿島町・志谷奥遺跡出土遺物) 青銅の祭具は県内各地で発見されているが、なかでも大量の銅剣358本と銅矛16本、銅鐸6個が一緒に出土した荒神谷遺跡は有名。古代出雲の謎を解くカギと言える。

